

## 令和4年度 大学院学校教育研究科入学式 ―学長告辞―

225名の新入生の皆さん、ご入学まことにおめでとうございます。上越教育大学の教職員を代表いたしまして、皆さんのご入学を心より歓迎いたします。

上越教育大学は、昭和53年10月1日に新構想の国立大学として設置されました。設立当初の計画では、現職教員の研修の場としての役割も担っており、入学定員の三分の二程度は教職経験を持つ者を入学させるということになっていました。現在では、入学定員は210名になっており、現職経験を持つ院生の割合も少なくなっています。また、大学院は、190名定員の専門職学位課程いわゆる教職大学院と、20名定員の修士課程を有し、専門的知識と優れた実践的指導力を身につけた教員を養成することを目的としています。これから2年間、教員免許取得プログラムの皆さんは3年間、また、1年制プログラムの皆さんは1年間、それぞれの目標の達成に向かって努力されることを強く願っています。私たち教職員は、皆さんのその努力が成果に結びつくように支援します。また、本学には、より高度な研究を希望する方々のために、連合大学院博士課程も設置されています。

さて、皆さんがこれから生活するこの上越の地は、とても自然豊かな地域です。とりわけ、今の時期は、厳しかった雪の季節が終わり、木々が芽吹き、桜の花も満開ですから、ぜひ高田城址公園などを訪ねて、満開の桜あるいは夜桜を楽しんでください。また山も近く、上杉謙信の居城のあった春日山や、日本のスキー発祥の地と言われている金谷山は、軽装で訪ねることもできます。さらに直江津方面に向かえば、海水浴場や、上越水族博物館「うみがたり」などもあります。高田の街中では、雁木づくりと呼ばれる雪国ならではの家屋を見ることもできますし、また、寺町どおりにはたくさんのお寺があります。せっかくの機会ですから、この地の自然と文化をぜひ体験してください。

ご存じのように、この2年間は新型コロナウイルス感染症の拡大で、学校は、さまざまな対応を余儀なくされました。本学も例外ではなく、その時々状況に応じて、対面授業であったり、オンライン授業やオンデマンド授業などを実施したりと、試行錯誤を繰り返しました。今年こそは計画通りに授業を実施したいと考えていますが、今後の感染状況によっては、また対応を検討せざるを得ないこともあるかもしれません。しかし、どのような状況にあっても、皆さんには、学びを止めることなく、頑張りたいと思いますし、本学は、そのために最大限の支援をしたいと思っています。

学校教育法の第99条には「大学院は、学術の理論および応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識および卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする」と記されています。大学院は大学を卒業して入学する場所ですから、教職大学院にしても修士課程にしても、とうぜん、より高度な学びや研究が求められます。学びや研究にとって大事なことは、知的好奇心と主体性だと私は考えます。

こうしたことは、小中学校でも、高校でも、大学でも変わりません。たとえば、「なぜこの昆虫はこんな形になっているのだろうか」とか、「なぜ社会にはこんなルールがあるのだろうか」とか、そうした素朴な疑問が、物事の本質を探りたい、探究したいという気持ちにつながっていくのだと思います。それ

は、人から与えられるものではありません。皆さん一人一人が、対象世界との関わりの中で触発され、生まれてくるものだと思います。皆さんは、本学で学ぼう、研究しようと考えて入学されたのですから、漫然と講義に参加しているだけというのではなく、そうした知的好奇心の赴くままに、主体的に学ぶことを続けていただきたいと思います。そして、自らが選んだテーマについて、指導教員、アドバイザー教員と議論ができるくらいにまで専門領域を極めていただきたいと思います。本学には、さまざまな学問分野の専門家がいますから、いろんなアドバイスがもらえると思います。

皆さんには、さらにもう一つお願いしたいことがあります。それは、社会問題に敏感になってくださいということです。

ご存じのように、今年2月24日に、ロシアがウクライナに軍事侵攻するという事態が起きました。平和であることが理想状態であることは言うまでもないことですが、しかし、国際紛争を解決する手段として武力を使う人々がいるということを経験中がまざまざと見せつけられました。国際紛争が起こる背景には、さまざまな要因があると思いますので、単純化して一方が善で一方が悪というような言い方はしにくいですが、しかし、市民が攻撃対象となっている様子をテレビなどで見聞きすると、どうしても軍事侵攻された側にシンパシーを感じるようになります。私もそうです。

皆さんはこうした紛争に対してどのような考えを持っているでしょうか。様々な考えがあるとは思いますが、子どもたちから尋ねられたらどのように説明するのでしょうか。これから教師になるという前提で（一部の方々はすでに教師の立場にあると思いますが）、こうした問題にも敏感でいていただきたいと思います。こうした紛争は、決して遠い国で起こっていることではありません。日本も、いくつかの国と領土問題を抱えています。難しい現実の問題から議論すべき課題を取り出し、子どもたちとともにみんなで議論し、正解は出せずとも、問題解決の道を探し続けるような教育活動ができるようになっていただきたいと思います。

いま学校教育は、個人の学力を伸ばすだけでなく、社会をどのように維持していくかを考える、あるいは、考えさせる方向に動いています。たとえば、SDGs教育。SDGsとは、「Sustainable Development Goals」の略称で「持続可能な開発目標」を意味していますが、国連総会で採択されたものです。17の分野別の目標と、169項目の達成基準が示されています。目標の例としてそのいくつかを示すならば、「貧困をなくそう」、「飢餓をゼロに」、「すべての人に健康と福祉を」、「質の高い教育をみんなに」というようなものがあります。そうしたことをさまざまな教科と結び付けて学びを深める活動が行われています。もちろん、基礎基本をしっかりと身に付けて、各教科の授業がきちんとできることは大事なことです。併せて、皆さんが教壇に立つ頃には、よりいっそう社会と結びついた問題が学校教育の中で議論されるようになっていくでしょうから、社会問題に敏感であってほしいと思うのです。

現代社会は、VUCAの時代ともいわれています。VUCAとは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）という4つの言葉の頭文字をつないで作られた用語で、「先行きが不透明で将来の予想が難しい状態」を意味しています。新型コロナウイルスのパンデミックや、ロシアのウクライナ軍事侵攻、またさまざまな自然災害にしても、ほんとうに予測不可能な事態が、次々と起こっているように感じます。こうした時代だからこそ、仲間とともに議論しながら、

難局を乗り越える力が求められるのです。ぜひそうした能力を、本学で身に付けていただきたいと思います。

今回、入学式は規模を縮小して実施させていただきました。そのことによってご参加いただくことがかなわなかったご来賓の方々や保護者の方々にはお詫び申し上げ、新入生の皆さんの学究生活をさまざまな形で支援することをお誓い申し上げて、告辞といたします。

令和4年4月5日  
国立大学法人 上越教育大学長  
林 泰成